

には四季の別がなく、四季のはっきりとした水田地帯のような共同労働の組織は必要がない)。

(4)この新しい生活環境に対応して、同族・村結合の代わりに、「感情」(友達であること、友情)を契機とするインフォーマルな集団が形成されてくる。(5)更に伝統的価値体系を本土から持ってきた世代と、次のマラヤに生れ育った世代のものが交代しつつある。この交代を知る規準として、(a)世帯が核家族より大きくないこと、(b)父子間の葛藤が増えて両者別々の核家族を作ることの二つが上げられる。(6)結局、彼らは「外見上は中国の伝統的な価値(体系)を保持しているように見えながら、実際は新しい型の社会を作っている」のである。

著者 Newell はイギリス流の社会人類学者で、このモノグラフは1954-5年の約10カ月間の参与調査によるものである。(1948年には四川省の成都付近の村をも調査している。)マラヤの華僑農民の社会構造を取り扱ったのは彼が最初であろう。彼自身本書を preliminary survey としているので今後更に研究を進めるのであろうが、欲をいえば全体社会的なパースペクティブをとり入れてほしかった。(前田成文)

Insor, D.: Thailand, A Political, Social and Economic Analysis. George Allen & Unwin Ltd., London. 1963. pp. 188

ドン・ムアン飛行場の説明から叙述が始まる点やあまり聞き慣れない著者の名前などからして、一見本書は、好事家のものした、いい加減な本のような印象を与えかねないが、しかし、実は、一般の本ではないまでも、それほどふざけた本ではない。

著者のタイへの関心は、広汎に及び政治経済の基本的特徴から、はては、大学教授の給料にまで及んでいる。しかし、本書の眼目は、サリットの施政のなかに、タイの将来の政治経済の動向を決める要因を求めることにあるようだ。

タイ国の政治については、70頁余りが割かれている。タイ政治を常識的に人物中心の政治と考え、30年代から今に至る著名政治家の解説がなされているが、タイ政治の有機的な構造把握が平板で、ひどく食い足りない。ただ、われわれの知ることの少ない58年以降のタイ政治の実態に、かなり筆が及んでいて、少なくともその個所は新鮮な思ひで読むことができる。経済に

関しては32頁が割かれているが、サリットの経済開発六カ年計画が焦点となっており、興味深く読める。サリット政権がタイ経済近代化の阻害要因をどう捉えているかを示す Kurit Punakan の11ヶ条(pp. 156~7)など面白いデータだ。全体としてサリットの政策に好意的で、将来に期待を抱かせる書きかたをしている。

全般的に、著者のタイにたいする評価は、厳しいようで甘い。官僚層の腐敗の原因を「低い給料と遅い昇進」に求めている点など、同情的な判断だ。そして、将来の政治のあり方を国際政治の動向と結びつけて考えている点なども、リアルな判断だが、タイの政治家にたいしてかなりスポイリングな考え方だ。しかし、評価といえるものがあるだけかもしれません。著者の評価の拠り所は、各章に点在する「アジア民主主義の諸問題」などの一般論めいた議論にあるらしい。しかし、そこに示される基本的問題意識が、余りに常識的でとってつけた感じなのは気になる。また、その問題意識が、著者の思考過程で、タイの現実にどう照射されたのかも不明瞭である。そういった点では、著者がアカデミックでないことが災いしている感じだ。しかし、その反面、アカデミックな処理を受けていないため、かえって、本書が、新鮮な魅力を備えるようになったふしもある。沢山のデータが、充分加工されぬまま盛り込まれたからだ。もっとも、そのデータは、もっぱら英文の二次資料から採られている。その点、本書は、絶対的魅力を欠く。ただ、タイの政治経済の最近の動向がかなりよく描かれている点で、本書は、ほかに知的好奇心を満たすさすがをもたぬ読者の欲求不満をば、かなりの度合、満たしてくれることだろう。その点を買うことにしたいと思う。(矢野暢)

Pendleton, Robert L.: Thailand. Duell, Sloan and Pearce, New York. 1962. pp. xvi + 321.

著書 Pendleton は1917~35の間にインド、フィリピン、シナでそれぞれ長期間、熱帯の土壌および農業の研究、指導にあたった後、タイ国にすみつき、1957年に死去するまでほとんどその全部をタイ国での研究、指導に過したという。本書は Pendleton の熱帯におけるこのような豊富な経験と数多くの研究業績を中心として R.C. Kingsbury その他の人々が補足、